OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「共通教育ティーチング・アシスタント研修」の実施と分析
Author(s)	服部, 憲児; 山成, 数明
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2010, 6, p. 65-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7898
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学大学教育実践センター紀要』第6号（2009），pp.65－70

【教育実践レポート】

「共通教育ティーチング・アシスタント研修」の実施と分析

服部　憲児・山成　数明

Implementation and Analysis of "the In-Service Training Program for Teaching Assistants in General Education"

Kenji HATTORI and Kazuaki YAMANARI

Institute for Higher Education Research and Practice planned and held the first "in-service training program for teaching assistants in general education" in April 2009. Prior to this training, we carried out a survey on the operations of teaching assistants and, on the basis of the results, organized the training program. The contents are the follows: (1) outline of the general education in Osaka University, (2) status and operations of teaching assistants, and (3) specific areas of attention for teaching assistants. According to the results of a questionnaire survey taken after the training program, many participants gave the program a high rating. However, we have some areas of improvement for future programs: grasping the actual conditions of teaching assistants more correctly, personalized treatment, follow-ups, flexible schedules, and so on.

はじめに

大学教育実践センターでは、FD 推進部門を中心に「共通教育ティーチング・アシスタント研修」（以下、TA研修）を初めて企画・実施した。それは授業期間前の平成21年4月7日（13：00～14：30）に大学教育実践センター大講義室において行われ、参加者はTA97名、教職員9名であった。

このTA研修を実施した背景には、少なくとも共通教育に関しては、実験系科目や健康・スポーツ科目などを除いて、TA研修はほとんど組織的に行われていなかったことがある。この点を解決する必要が一方ではあった。

他方では、TAをプレFDと位置づけて、将来の研究・教育職に向けてのトレーニングの場として充実させていくという積極的な理由もある。「国立大学法人大阪大学ティーチング・アシスタントの受入れに関する規程」において、「教育者としてのトレーニングの機会を学生に提供する」と定められていることを、実質化させる作業の第一歩でもある。

本稿は、TA研修の実践報告を行うものである。具体的には、TA研修の準備作業として実施された「大学教育実践センター・TAアンケート」の分析、TA研修の実施報告、事後アンケート結果の分析を行う。また、これら考察からTA研修の成果と問題点を明らかにするとともに、今後の展望について検討する。

1．TAアンケート（事前アンケート）の実施

TA研修の実施を検討するにあたって、そもそもTAが何に困っており、何を求めているのか、実際にどのような業務を行っているのか、といった基本的事柄すら把握できていないことがまず問題となり、実態を把握するためにアンケート調査を実施することにした。TA研修の先進校でもある北海道大学が既に完成度の高いアンケートを実施していたことから、それを軸に阪大の実状に合わせて、いくつかの設問を追加・削除・修正して実施した[1)]。

アンケート調査は、平成20年度共通教育科目のTAを対象として、平成21年2月上旬にe-mailを利用して実施した。回答数は198であった。全24問（フェイス項目も含む）で構成され、TAに対する指導、業務の実態、業務に対する自己評価、TAの教育効果などについて質問した。以下、主な結果について紹介しておこう。

(1) TAの仕事に対する評価

TAは、総じてその仕事に対して肯定的に捉えている。まず、「あなたは担当科目のTAとして学生とうまく接することができたと思いますか」という設問（図１）と、「あなたはTAとしての仕事はうまくできたと思いますか」（図２）に対して、いずれも約８割が肯定的な回答（「大変うまくできた」「ややうまくできた」）をしている。

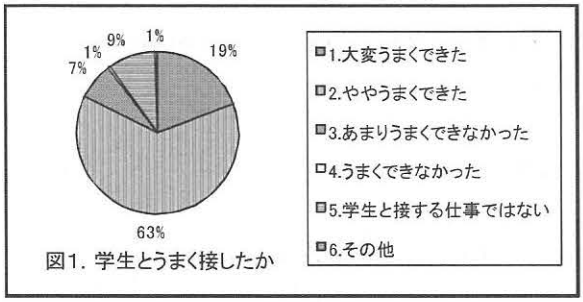

図1. 学生とうまく接したか

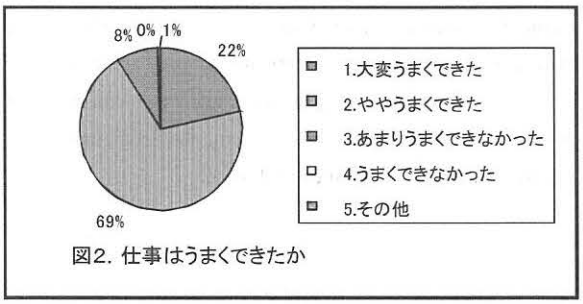

図2. 仕事はうまくできたか

また、「担当科目のTAをして楽しかったですか」という設問（図３）には約９割が「楽しかった」（「大変楽しかった」「やや楽しかった」）と回答し、「担当科目のTAの仕事にやりがいを感じましたか」という設問（図４）には、約４分の３が肯定的な回答（「大いに感じた」「やや感じた」）をしており、多くのTA が仕事にやりがいを感じている。

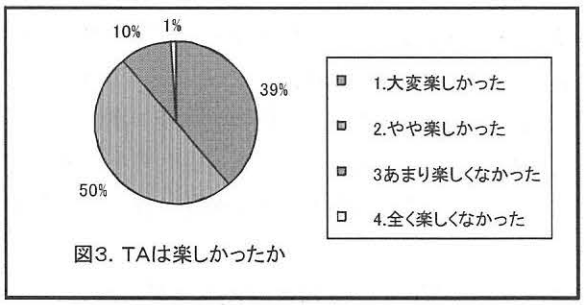

図3. TAは楽しかったか

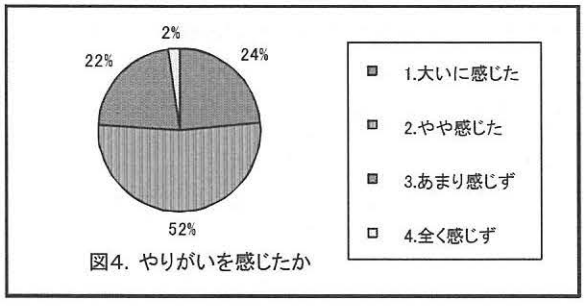

図4. やりがいを感じたか

同様に、「担当科目のTAをやって自分のメリットになったと思いますか」という設問（図５）には、９割以上が「大いにそう思う」「ある程度そう思う」と回答しており、大多数がTAをやって自分のメリットになったと思っている。「今後も担当科目（またはそれと同等の科目）のTAの仕事をしたいですか」という設問（図６）には７割以上が継続を希望している（「是非やりたい」「できればやりたい」）。やや少ないように思えるかもしれないが、「卒業するので継続できない」旨の注釈も多く付けられていたことを考えると、決して低い数値ではないと解釈できよう。

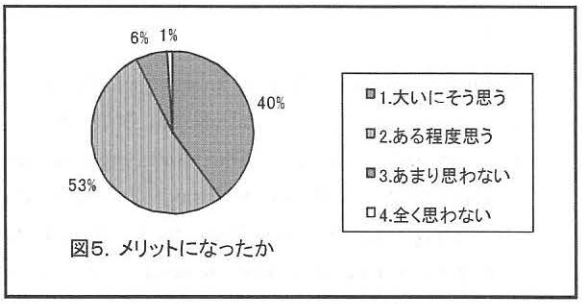

図5. メリットになったか

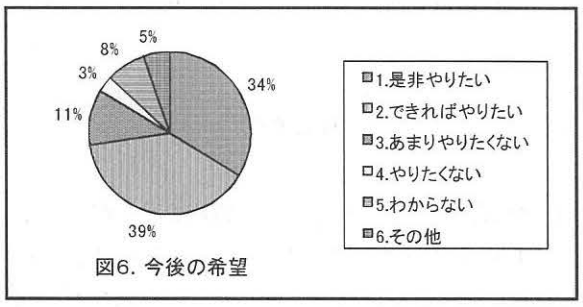

図6. 今後の希望

(2) TA経験の教育効果

次にTA経験の教育効果についてみてみたい。これに関係する質問項目は、「あなたは学生を教える仕事に自分が向いていると思いますか」（図７）と「あなたはTAの経験が、将来自分自身が教育する場合の参考になったと思いますか」（図８）である。

前者については、TAの約７割が「教える仕事に向いている」と思っている（「大いに向いていると思う」「やや向いていると思う）。後者については、約４分の３の者がTAの経験が将来の教育活動に「参考になった」（「大いになったと思う」「ややなったと思う」）と考えている。

これらの回答状況から、TAにはプレFDとしての効果があると思われる。少なくともプレFDの機会としてのTAの潜在的可能性は認められよう。プレFDとしての効果は、意識的であれ無意識的であれTA側にもかなりの程度認識されている。意識的に取り組ませることで、よ

り効果が高まると考えられる。

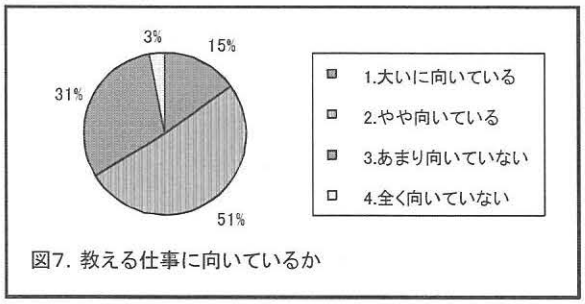

図7. 教える仕事に向いているか

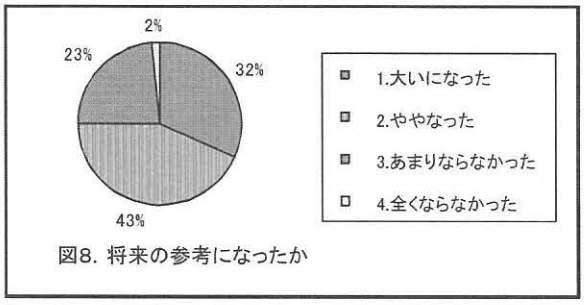

図8. 将来の参考になったか

(3) TAの課題

その一方で、今回のアンケート調査からTAに関するいくつかの課題も明らかになった。まず第1に、TAの半数は担当授業科目のシラバスを読んだことがない。すなわち、「あなたはTA担当授業科目のシラバスを読んだことがありますか」という設問（図9）に対して、50%が「読んでいない」と回答している。

第2に、TAの半数は学生への接し方や態度・言葉遣いなどの指導を十分に受けていない。「学生への接し方やTAとしてとるべき態度，言葉遣いなどについて教員から指導を受けましたか」という設問（図10）に対して、「何も受けなかった」とする者が43%にものぼる[2)]。

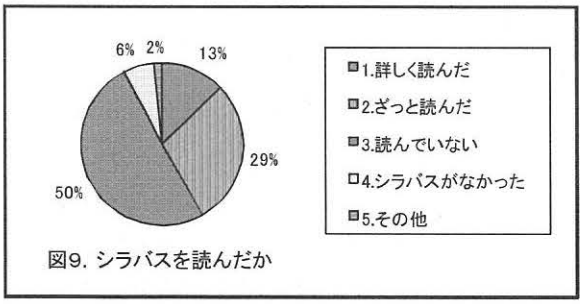

図9. シラバスを読んだか

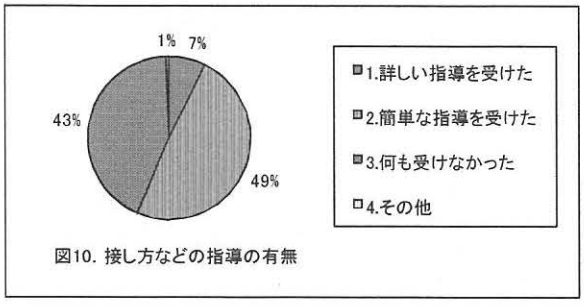

図10. 接し方などの指導の有無

第3に、TAと教員の相談時間が設定されてたケースは少数にとどまっている。すなわち、「TAの仕事に関して授業担当の教員との相談時間は設定されていましたか」という設問（図11）に、「はい」と答えたのは約2割であった。ただし、多くは「設定はされていなかったがいつでも相談できた」と回答しており（70%）、相談しようと思えば相談できる体制には一応あるので、重大な問題とまでは言えないかもしれない。しかしながら、TAに遠慮があると十分に意思疎通が取れない可能性もあり、何らかの対策は必要であると思われる。

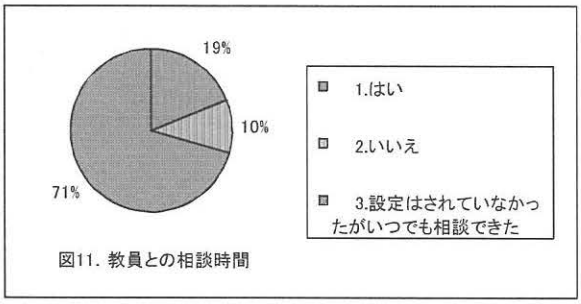

図11. 教員との相談時間

この他にも、「TAとして働いてみて、TAの仕事を始める前に予め聞いておきたかった、知っておきたかったと思うことはありますか」という設問（自由記述）に数多くの回答があった。その主な事柄は以下の通りである。

①基本的事項
- 文系総合棟などの設備・使用方法
- TAの応募方法
- 阪大の共通教育（他大学から進学した院生）
- TAの業務時間

②授業の中身に関わる事項
- 具体的な仕事の内容
- 要求される知識や負担
- 使用する機材などについて
- 教員の指導方針
- 授業の全体像
- 採点基準
- 学生から出される質問例
- 学生のレディネス

以上のように、アンケート調査から、TAに対して事前に指導しておくべき事柄がいくつかあることが明らかになった。大学教育実践センターでは、これらの課題は、「共通教育ティーチング・アシスタント研修」の実施と「共通教育TAマニュアル（仮称）」の作成とを通じて、

一定程度対応することができると考えた。TA研修は4月上旬（授業開始前）に実施し、TAの相談窓口を整備するとともに、マニュアル作成に向けて検討することとした[3]。

2．TA研修の実施

(1) TA研修の目的と概要

以上の事前調査を踏まえ、「TAの力量向上および円滑な活動の支援、また、それによる共通教育の改善と円滑な実施に資すること」を目的としてTA研修を実施した。日程は授業期間開始前日に設定した。対象は共通教育科目のTAとしたが、既にTA研修を独自に実施している実験系科目や健康・スポーツ教育科目、そして情報活用基礎科目のTAは今回は対象外とした。

実施内容については、関係する事務職員も交えて検討した。事務手続きに関わる部分が大きいこともあるが、SD（スタッフ・ディベロップメント）の一環として関わってもらうことも意識した。当日も出席を要請し、実際にTAからの質問にも答えてもらった。

当日のプログラム等は以下の通りである。

○プログラム

1．大阪大学の共通教育について（10分）
　　工藤眞由美（大学教育実践センター長）
2．TAの位置付けと業務等について（20分）
　　窪田高弘（大学教育実践センター・カリキュラム開発部門長・前TA活用委員長）
3．TAの業務を遂行するにあたって（15分）
　　服部憲児（大学教育実践センター・FD推進部門副部門長）
4．質疑応答（45分）

司会：山成数明
（大学教育実践センター・教育実践研究部長）

○配付資料

・「共通教育ティーチング・アシスタントの服務等について」
・「共通教育担当教員マニュアル」（抜粋）

(2) TA研修の具体的内容

①「大阪大学の共通教育について」

まず最初に「大阪大学の共通教育について」の紹介を行った。これを取り入れたのは、アンケートの自由記述欄で「阪大の共通教育について事前に知っておきたかった」とする回答が、大学院から阪大に来た者を中心に多数あった事による。実際に、当日の参加者も外部からの進学者が多数派であり、この内容を設定したことは正解であったと考える。

具体的には、大阪大学の共通教育における「教養」の意味が説明されたのち、実践センターが現在力を入れている活動（たとえば学生・教職員懇談会、ステューデント・コモンズなど）の紹介がなされた。

②「TAの位置付けと業務等について」

次に、「TAの位置付けと業務等について」の説明を行った。そこでは、共通教育のTA は教育の練習の機会であること、TAは雑務処理係であってはならないことを強調した。これはTAに教育活動の意識付けをすることにより、TAのプレFD機能を高めることを意図するものである。

また、勤務表に関すること、就業規則に関することの説明を行うとともに、TA相談のメール受付を開始したことを周知し、円滑な事務処理と適正な業務が行われることを期した。

③「TAの業務を遂行するにあたって」

最後に、「TAの業務を遂行するにあたって」留意すべき事項について説明した。まず、当日配付資料の「共通教育担当教員マニュアル」に基づき、スケジュールや施設の利用に関して解説を行った。これは共通教育担当教員に毎年配布しているものであるが、TAが知っておくべき事柄も多く含まれており、関係箇所を資料として配付した。将来的には「共通教育TAマニュアル（仮称）」を作成する方向で検討している。

また。留意事項として、「シラバスを見る」、「先生との連絡を密にする」、「学生には丁寧に接する」の3点が挙げられ、説明がなされた。これらは、上述の事前アンケート調査において特に不十分であった点であったので、ここで時間を割いて指導することとした。

④質疑応答

質疑応答では、服装に関することや事務書類の扱いなどに関して質問がなされた。これに対して教員および事務職員から回答および補足説明がなされた。

(3) TA研修アンケート（事後アンケート）の結果

来年度に向けてTA研修の改善を図るためのデータとして、「共通教育ティーチング・アシスタント研修・アンケート」を実施した。参加者のうち90名が回答した。このアンケート自体はシンプルなもので、「本日のプログラムは貴方にとって有益なものでしたか」と「本日のTA 研修は全体として貴方にとって有益なものでしたか」という２つの設問に自由記述を加えたものである選択式の質問については、いずれも肯定的な評価が大半を占めており（図12～15）、TAにとって有用な情報を伝達できたのではないかと考えている。

「TA研修で取り上げて欲しい内容」について、自由記述形式で尋ねたところ、様々な意見が出された。主なものを紹介すると、①過去に起こったトラブル・問題事例、その対応などを知りたい、②前任者の感想、TA経験者の声などを直接聞きたい、③機械操作や実際の仕事などの具体例を示して欲しい、④手続きについての詳しい説明をして欲しい、といったことがあげられた。いずれも実用的な事柄である。これは、一方ではTAが真剣に業務をこなそうとしていることの表れであるが、他方ではこれらの面でTAが不安を抱えていることを意味すると理解できよう。TA研修の内容充実に加えて、授業担当教員との連携も視野に入れて対応する必要があると思われる。

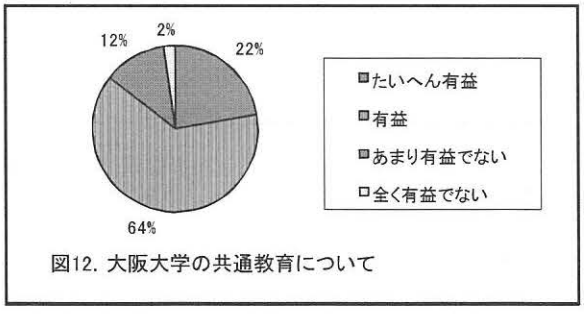

図12. 大阪大学の共通教育について

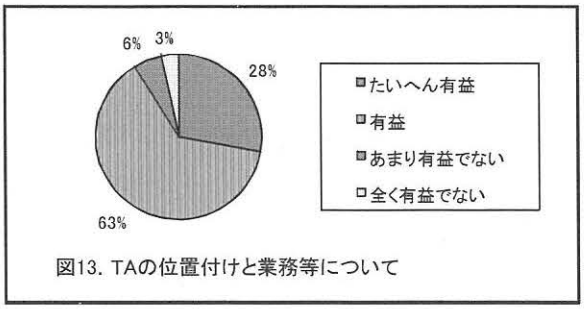

図13. TAの位置付けと業務等について

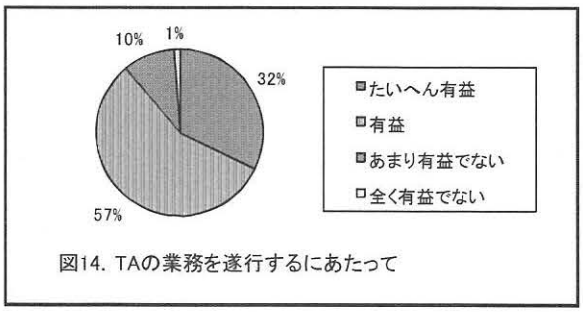

図14. TAの業務を遂行するにあたって

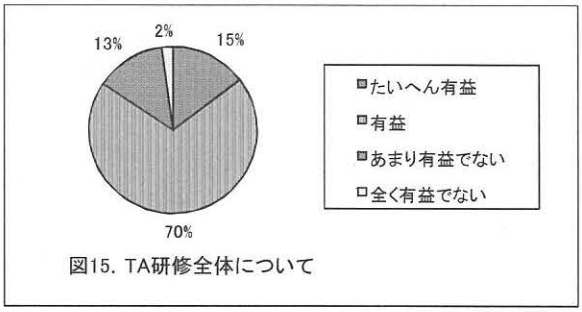

図15. TA研修全体について

自由記述にも多くの意見・感想・要望等が寄せられた。このうち、TA研修への要望や課題に関するものは次の「TA研修の課題と展望」の部分で取り扱うこととし、ここではそれら以外について代表的なものを紹介する。

まず「分かりやすい」「参考になった」とする記述がみられた。手探りで実施した側からすると、一安心である。具体的なものとしては、TAには「教員としての技術を学ぶという意義がある」ことを理解できた、あるいは「TAとしての責任感と使命感を強く感じるようになりました」とする記述もあり、こちらのメッセージが十分に伝わっている。また、「TAマニュアル」の作成を求める意見が多く出された。今回は教員マニュアルの抜粋を配布したが、これに対する要望と期待は大きく、検討を要する事柄である。

3．TA研修の課題と展望

以上、TA研修について述べてきたが、実践センター

としては初めての実施であり、課題も多く残った。最後にこの点について言及しておきたい。

まず第１に、TAの実態把握と個別対応の問題である。TA研修当日の内容に対する満足度は高かったが、その準備としてのTAの実態把握は難しい。今回はアンケートを実施し、多くのTAが回答に協力してくれたので、貴重なデータを得ることができた。しかしながら、これは個々のTAの事情まで把握できるものではない。また、把握できたにしてもTAが必要としている情報は一律ではなく、それを網羅的に把握して個別に対応することはまず不可能である。

第２に、逆にTA研修後のTAに対するフォローアップの問題がある。実施アンケートにも、TA業務開始後のフォローアップを求める声があった。相談窓口を設けているが、どのような相談が寄せられるかは未知である。適切に対応していく体制を整えなければならない。また、希望の多かった「TAマニュアル」の作成も早急に検討する必要があろう[4]。

第３に、TA研修の対象者を今後どうするかという問題である。今回は独自に研修を実施している一部科目を除く全ての共通教育のTAとした。１つはこれで適切かどうかを再検討する必要があろう。いま１つは、今回研修を受けたTAあるいは事情により欠席したが継続のTAをどうするかである。特に前者については、重複する話も多くなると想定されることから、その取扱を検討しておかなければなるまい。

第４に、実践センターによるTA研修だけでは対応が難しい問題の存在である。例えば、個々の授業の中身や担当教員に関する問題などは、別途方策を検討する必要がある。前者は授業担当の各教員に協力を得る必要があり、そのための啓蒙的活動が必要になるかもしれない。後者については、上述のように相談窓口を設けることで一定の解決を図っているが、その運用については実施しながら検討していくことになる。

第５に、より技術的なことであるが、日程の問題である。今回は授業開始前日に実施することとしたが、実施アンケートでは「連絡バスのある時に実施してほしい」「早めに実施」などの意見があった。もっともな意見であるが、前者については連絡バスが運行される授業期間に実施することは不可能であり、早く実施するにしてもTA採用の決定時期より前には実施できないので限界があり、いずれも悩ましい問題である。

このように次年度に向けて解決すべき課題は多いが、新しい試みである分、逆に大きな可能性も秘めていると見ることができる。先進校の情報も集めつつ、共通教育の質を高める、より実りのあるものへと改善していきたい。

註

1）宇田川拓雄「TAよ大志を抱け－北大TAアンケート調査結果の分析と考察－」『高等教育ジャーナル－高等教育と生涯学習－』第15号（2007年）、113～131頁。アンケート用紙には、これをもとに作成したことを明記した。

2）ただし、TAの仕事については殆どのTAが指導を受けている。「担当科目のTAの仕事（授業補佐，準備作業，採点など）について，教員から指導を受けましたか」という設問には、96％のTAが「詳しい指導を受けた」「簡単な指導を受けた」と回答している。

3）アンケートの最後に「これからTAになる人達に伝えておきたい事、メッセージなどがあれば、御自由にお書き下さい」という設問を設けたところ、メッセージが多数寄せられた。これらを「TAマニュアル」に掲載するなどして伝えていきたい。

4）大学教育実践センター・TA活用検討委員会にて作成検討中である。

（はっとりけんじ　大学教育実践センター
FD推進部門・准教授）
（やまなりかずあき　大学教育実践センター
FD推進部門・教授）